乳房外 Paget 病

腋窩 Paget 病の 1 例

柴山 久代^{*1} 加藤文美香^{*1} 近藤 隆男^{*1}
満間 照之^{*2} 原 一夫^{*3}

Summary

We presented a case of axillary Paget's disease. The patient was a 75-year-old man who noticed on his left axillary area a round shaped erythema of 2 centimeters in diameter. In 2 months, he had an itch and he consulted us. By punch biopsy, we diagnosed Paget's disease as carcinoma *in situ*. But, histological examination of excision specimen showed microinvasion of Paget's cells in dermis.

In extra-mammary Paget's disease, axillary Paget's disease is rare compared with external genital Paget's disease. About microinvasion in dermis, in axillary Paget's disease it is more frequent than in external genital Paget's disease. In the case of single axillary Paget's disease as well as external genital Paget's disease, we have to treat it as cancer.

Key words : Axillary Paget's disease, Erythematous lesion, Microinvasion

はじめに

乳房外 Paget 病は、外陰部に好発し、腋窩のみに発生するのは稀である。

腋窩 Paget 病のうち外陰部 Paget 病と重複する腋窩病変より腋窩単独のほうが、下床への浸潤が多いといわれている。今回、我々は、臨床像は紅斑のみであったが、病理組織は浸潤癌であった腋窩 Paget 病を経験したので、若干の考察をまじえて報告する。

症 例

患 者：75 歳，男性

主 訴：左腋窩の紅斑

既往歴：前立腺肥大，頸椎症，発作性心房細動，陳旧性脳梗塞

家族歴：特記すべきことなし。

現病歴：平成 10 年 5 月に、左腋窩の紅斑に気付いた。癢痒感が出現したので、平成 10 年 7 月当科を受診した。直接鏡検にて白癬菌を認めず、ステロイド外用剤にも反応を示さなかった。

現 症：左腋窩に直径 2cm の境界明瞭な紅斑を認める。形は不整形～類円形で、鱗屑を伴う。色の濃淡を認めるが、浸潤は触れない。腋窩リ

^{*1} Hisayo SHIBAYAMA, Fumika KATO, Takao KONDO：名古屋掖済会病院

^{*2} Teruyuki MITSUMA：名古屋大学皮膚科学教室

^{*3} Kazuo HARA：愛知医科大学病院病理部

図 1. 初診時臨床像
左腋窩に直径 2cm の紅斑を認める

図 3. 病理組織所見 (H.E. 染色強拡大)
真皮内毛嚢上皮内に腫瘍細胞の浸潤を認める。
その周囲に腫瘍細胞が散在しているのを認める

ンパ節は触知しない。他の部位に皮疹は認めない (図 1)。

一般臨床検査成績：血液一般，尿検査，生化学検査にて総ビリルビンがやや高値 (2.3mg/dl) 以外特に異常を認めない。胸部 CT 画像上異常所見はない。血清 CEA は 4.4ng/dl と正常範囲内であった。

治療と経過：紅斑中心部より生検した。表皮内に，胞体の明るい異型細胞が孤立性，散在性に認められたが基底膜は保たれていた。腋窩 Paget 病と診断し，紅斑部より 3cm 離れた正常皮膚を数ヵ所生検したが，腫瘍細胞は認めなかった。境界より 3cm 離して脂肪組織の深さまで切除し，全層植皮を行った。全摘標本病理組織から腫瘍細胞の真皮内浸潤を認めたので，再度

図 2. 病理組織所見 (H.E. 染色弱拡大)
表皮の皮厚と表皮内に胞体の明るい細胞の集塊を認める。真皮内にも同じ細胞の散在を認める

腋窩リンパ節郭清術を行った。その後，右腋窩と外陰部に直径 5mm の紅斑を認めたが，生検結果は，脂漏性角化症であった。全身検索からは悪性所見を認めなかった。

病理組織学的所見：表皮内基底膜に沿って胞体の明るい核の大きい異型細胞が散在性，集簇性に認められる。一部に表皮が肥厚し腫瘍細胞が胞巣を形成している像をえた。真皮内毛嚢上皮と思われる部位に腫瘍細胞を認めた。また，真皮内に腫瘍細胞の散在している部分が認められた (図 2，図 3)。PAS 染色は陽性，アルシアン青染色も陽性であった。

免疫組織学的所見：CEA 陽性，EMA 陽性，レクチンの DBA も陽性であった。

考 察

腋窩 Paget 病は，乳房外 Paget 病の中では発生部位としては比較的稀である。大原らによれば，109 例中，外陰部 104 例，肛囲 3 例，腋窩 4 例 (うち単発 1 例) であり¹⁾，久木田らによれば，119 例中，外陰部 104 例，肛囲 5 例，腋窩

表 1. 単独腋窩 Paget 病 報告例 (1983 ~ 1998 年)

症例 (報告年)	患者 年齢	性別	初診まで	臨床像(大きさ)	LN腫脹	病理組織		治療	予後 再発
						下床の変化	LN転移 **		
1 ⁷⁾ (1983)	37	♀	1 年	紅斑 皮下硬結 (2.5×1.8cm)	(-)	(+)	(+)	Op. 広範 (LN郭清) CO. 照射	(-)
2 ⁶⁾ (1985)	74	♂	5 年	紅斑 局面 (3.3×4.5cm)	(-)	(+)	(+)	Op. 広範 (LN郭清) FT207坐薬	(-)
3 ⁷⁾ (1986)	65	♂	2 週	淡紅色素斑 局面 (1.8×1.5cm)	(-)	(-)	—	Op. 全摘→再切除 (5cmはなして (広背筋皮弁)	(-)
4 ⁷⁾ * (1989)	85	♂	1 年	①紅色素斑 (2.5×3.5cm) 浸潤・びらん	(-)	(-)	(-)	Op. 広範 (1.5cmはなして) (LN郭清)	(-)
				②くすみ大の淡紅色素斑 色素脱失	(-)	(-)	(-)	Op. 広範 (1.5cmはなして) (LN郭清)	(-)
5 ⁷⁾ (1989)	78	♀	2 年	紅色素斑 浸潤 (5.0×1.5cm)	(-)	(-)	—	Op. 広範切除 (2-3cmはなして)	(-)
6 ¹²⁾ (1990)	66	♀	3 ヶ月	紅斑 (4.0×2.0cm)	(-)	(-)	(-)	Op. 広範 (5cmはなして) (LN郭清・分層植皮)	(-)
7 ¹²⁾ (1990)	78	♀	2 年	淡褐色斑 一部局面 (3.3×1.5cm)	(-)	(-)	—	Op. 全摘 (5mmはなして) (縫縮)	(-)
8 ¹⁴⁾ (1991)	52	♂	2 年	紅斑 結節・びらん (4.5×4.2cm)	(-)	(-)	(-)	Op. 広範 (LN郭清・分層植皮)	(-)
9 ¹⁴⁾ (1992)	79	♂	数ヶ月	紅色素斑 色素沈着 (7.0×6.5cm)	(-)	(+)	—	Op. 全摘 (3-5cmはなして) (縫縮)	(-)
10 ¹⁴⁾ (1994)	52	♀	2 年	紅斑 びらん・浸潤 (2.0×3.5cm)	(-)	(+)	(-)	Op. 広範 (1.5cmはなして) (LN郭清)	(-)
11 ⁷⁾ (1994)	81	♂	2 年	紅斑 びらん (3.0×3.0cm)	(-)	(-)	(-)	Op. 広範 (3cmはなして) (LN郭清・分層植皮)	(-)
12 (自験例) (1998)	75	♂	2 ヶ月	紅斑 (2.0×2.0cm)	(-)	(+)	(-)	Op. 全摘→再手術 (3cmはなして) (LN郭清・全層植皮)	(-)

* 両側腋窩 Paget 病

** — は、リンパ節郭清を行っていない例

4 例である²⁾。その他の報告においても同様である³⁾⁴⁾。また、外陰部病変に併発する腋窩 Paget 病は、腋窩病変が先行することは極めて稀である⁶⁾。また、単独の腋窩 Paget 病のほうが多いといわれている。藤本らの集計では、41 例中 30 例が腋窩単独症例でそのうち 14 例に下床に癌が認められ、11 例が他の部位の Paget 病との合併例で下床に変化を認めたものは 1 例のみである⁷⁾。久木田らの報告では、単独腋窩 Paget 病 10 例中 9 例までに癌を確認しており極めて高率である。一方、外陰部 Paget 病の場合は、大原らによると、約 3 割に下床への浸潤を認めている。

また、最近の単独腋窩 Paget 病の報告から、臨床像、病理組織像、治療についてまとめた (表 1)。下床への浸潤は自験例を含め 12 例中 5 例に認められる。乳房外 Paget 病の臨床像は、初期は、軽い紅斑、脱色素斑で痒疹を伴う

ことが多く、ついで浸潤傾向となり、鱗屑や痂皮を付着する。さらに進むと、糜爛面や局面を形成し、下床腫瘤を生じるようになる⁵⁾。しかし、我々の集めた症例では、臨床像と腫瘍の真皮内浸潤について、特に関係は認められなかった。自験例も、紅斑だけという早期臨床像であったが、病理組織像は、腫瘍の真皮内浸潤を認めた。腋窩 Paget 病では、臨床像に関係なく真皮内浸潤の可能性のあるものとして治療する事が大切である。

文 献

- 1) 大原國章, 大西泰彦, 川端康浩: 乳房外 Paget 病の診断と治療. Skin Cancer, 8(S1): 187-208, 1993.
- 2) 久木田淳, 佐藤昌三: Axillary Paget 病の 1 例. 皮膚科の臨床, 9(6): 485-490, 1967.
- 3) 石原和之: Paget 病全国アンケートの集計と説明. Skin Cancer, 9(1): 37-43, 1994.
- 4) 宮里肇: 乳房外 Paget 病の知見補遺. 日皮会誌,

- 82 (8):519-539, 1972.
- 5) 森俊二:Paget病 診断と治療指針. Skin Cancer, 9 (1):32-37, 1994.
- 6) 高柳健二, 中村雄幸, 柏英雄, 他:腋窩病変が先行した Triple-Extra-mammary Paget's Disease の 1 例. 日形会誌, 12:631, 1992.
- 7) 藤本亘, 雀部将:腋窩 Paget 病—自験例および報告例のまとめ—. 臨床皮膚科, 37 (5):433-439, 1983.
- 8) 鹿島真人, 斉藤一義, 牧田あつ宣, 他:腋窩 Paget 病の 1 例. 皮膚科の臨床, 27 (3):311-316, 1985.
- 9) 高橋正明, 野村和夫, 河村葉志子, 他:腋窩 Paget 病の 1 例. 臨床皮膚科, 40 (10):872-873, 1986.
- 10) 大草康弘, 長島正治:両側腋窩 Paget 病. 臨床皮膚科, 43 (3):181-184, 1989.
- 11) 黒沢伝枝, 宮本秀明, 長谷哲男:腋窩 Paget 病の 1 例. Skin Cancer, 4 (1):19-22, 1989.
- 12) 青木律, 梅田敏彦, 白井洋司, 他:腋窩 Paget 病の 1 例. Skin Cancer, 5 (2):64-66, 1990.
- 13) 小林まさ子, 江口奈緒美, 永井司秀史, 他:腋窩 Paget 病の 1 例. 皮膚科の臨床, 32 (5):751-753, 1990.
- 14) 本間真:腋窩 Paget 病. 皮膚, 33 (1):1991.
- 15) 松田真弓, 間山諭, 千葉純子, 他:腋窩 Paget 病の 1 例. 皮膚科の臨床, 34 (13):1894-1895, 1992.
- 16) 大草康弘, 田中信, 古川隆代:腋窩 Paget 癌—自験例の報告と本邦報告例の検討—. 臨床皮膚科, 48 (11):1029-1032, 1994.
- 17) 大西誉光, 大西泰彦, 大原國章:腋窩 Paget 病の 1 例. 皮膚科の臨床, 36 (2):219-222, 1994.